

ジョン・ロック年譜

一六三二年

八月二十九日。サマセット州 (Somersetshire) 北方の村リントン (Wington) に生れる。父ジョン・ロック (John Locke)、富裕な郷士、郡検査官。母アグニス・キーン (Agnes Keene ロックの幼時に他界)。

幼年時代を、商業・政治の中心ブリistol (Bristol) に近いペンسفオード (Penstford) の村で過ごす。父、ロックの教育に深い配慮を拂い、ピュアリタンの規律によって訓育。ロックまた父にあつい敬愛の念を抱く⁽¹⁾。

一六三七年 (五歳)

弟トマス (Thomas) 生れる。ただひとりの兄弟。

一六四二年 (一〇歳)

父、王黨派の多い近隣の中であって、議會軍に投じ、義勇軍の騎兵隊長となる。これによって家産傷手をこうむるも、父のこの行動と、時局にたいする關心とは、政治的・宗教的問題にかんする・ロックの態度形成の上に強い影響を與える。

一六四六年 (一四歳)

父の友人訪客のポプム大佐 (Colonel Popham) のすすめにより、當時議會側にあったウェストミンスター・スクール (Westminster School) に入學。

古典を學習。しかし、學校教育にたいし好ましからぬ印象を抱く⁽²⁾。

ジョン・ロック年譜

一橋論叢 第三十二卷 第五號

一年以上に、後の詩人ドライドゥン (John Dryden) および、高名な神學者サウス (Robert South) あり。

一六五一年 (一九歳)

〔航海條令 (The Act of Navigation) 制定される。〕

一六五二年 (二〇歳)

ウェストミンスター・スクールの特待給費生となり、オクスフォードのクライスト・チャーチ (Christ Church) に入學。以後三〇年以上にわたって、同大學に關係。

當時の總長はクロムウェル、副總長およびクライスト・チャーチの學部長はジョン・オウエン (John Owen)。オウエン、王黨側にあつたために受けた・大學の被害の復興に盡力。

オウエンは、組合教會派に屬し、すぐれて寛容かつ自由主義的見解を抱く。ロック、信教自由の思想につき大きな影響を受ける。課程そのものは無味乾燥。しかし、論理學および哲學にたいする・ロックの關心は、この大學で養われる。

學業よりは廣く學友との交際を楽しむ。

一六五四年 (二四歳)

クロムウェルの對オランダ講和を祝し、オウエン、讚詩を公刊。ロックもこれにラテン語の短詩と英語の長詩とを寄せる。⁽⁶⁾

一六五六年 (二三歳)

バチャラ・オヴ・アーツの學士號をえる。

一六五八年 (二六歳)

マスタ・オヴ・アーツの學士號をえる。

一六五九年（二七歳）

ホップズの友人、ウエストミンスターおよびオクスフォード時代のロックの同級生、ヘンリ・スタップ（Henry Stubbe）からの著書『信仰事項にかんする・爲政者の権力の起源と範圍とにかんする一論説』⁽⁷⁾を贈られる。ロック、これにたいする禮狀の中で、信教と政治權力との關係にかんし最初の意見を表明。

一六六〇年（二八歳）

クライスト・チャーチのギリシャ語講師に任ぜられる。

エドワード・バグショウ（Edward Bagshaw）の匿名パンフレット『宗教的信仰における無關係事項にかんする大問題の簡述』⁽⁸⁾にこたえるため、『爲政者は、宗教的信仰にかんする無關係事項の運営を合法的に命令し決定しうるや否や』の表題で、英文およびラテン文の論説それぞれ一つを執筆。

同じく、信教と政治權力との關係につき、『ロマ共和國考』⁽¹⁰⁾を執筆。

王位復興を歓迎したのみでなく、強力な政治權力を要望。フィルムマー、ホップズの影響下にあった模様。信教と政治權力との關係については、フッカーの所論を踏襲。⁽¹¹⁾

この年から一六六四年にわたり、自然法にかんする・一連の論説を執筆。⁽¹²⁾
〔王立協會設立される〕。

一六六一年（二九歳）

父ロック死ぬ（五四才）。弟トマス死ぬ（二三才）。

『備忘録（Common-Place Books）』⁽¹³⁾を記し始める。この年の備忘録の中には、信教と政治權力との關係にかんする項目『僧權』⁽¹⁴⁾および、これについての見解の轉換を示す『教會』が記される。

一橋論叢 第三十二卷 第五號

一六六二年(三〇歳)

クライスト・チャーチの修辭學講師に轉任。更に、道德哲學教務監となる。

〔國王チャールズ二世、信仰自由令 (the Declaration of Indulgence) を發す。〕

一六六五年(三三歳)

教職を離れる。聖職につく義務を負う神學士となる。ロック、この義務に服さず、研究員の身分放棄するべきところを、勅許によって保有。

一月。舊學友ウィリアム・ゴドルフィン (William Godolphin) の推舉により、ブランドンブルク選帝侯への大使サー・ウォルター・ヴェイン (Sir Walter Vane) の祕書となり、西獨クレーフェ (Kleve) におもむく。

大使のため、本國政府あて公文書の作成にあたる。

友人の物理學者ロバート・ボイル (Robert Boyle) その他にあて、任地の慣習、諸事情につき圖表入りの手紙を寄せる。任地における、信教自由の氣風に注目。

一六六六年(三四歳)

二月。イングランドに歸る。

スペイン大使として赴任直前のサンドウィッチ卿 (Earl of Sandwich) 付祕書の地位を申出でられるも、これを辭退。

一、二週間、郷里サマセットに過ごす。この間、ボイルから寄贈の氣壓計による實驗を試みる。

五月。オクスファード大學に戻る。

醫學の研究を始める。

ボイルあての手紙で、化學上の實驗、醫學研究のための植物採集について語る。

總長クラランドン (Lord Clarendon) から大學評議會あて、ロックに醫學得業士、および博士の稱號授與の申入れあるも、ロックの宗教上の見解による妨害によって實現せず。

夏。オクスファードの醫師デイヴィッド (David) の紹介により政治家アンソニー・アッシュリー・クーパー (Anthony Ashley Cooper

後に(一六七二年)シャーフツベリ卿 Earl of Shaftesbury に叙せられる⁽¹⁵⁾の知遇をえる。
九月。ロンドンに大火。ロック、これによる・大氣現象の變化を記録⁽¹⁶⁾。

一六六七年(三五歳)

ロンドンのアシュリ邸に住む。その家族の相談役、主治醫、友人、およびアシュリの一子アンソニの家庭教師となる。
生涯において最も平穩かつ幸福な時期をおくる。醫學の研究續行。アシュリを通じ、世事を知り、國事に接する機會をえる。
アシュリの示唆により、『信教自由にかんする論攻』を執筆⁽¹⁷⁾。

有名な醫學者シデナム(Thomas Sydenham)に知られる⁽¹⁸⁾。シデナム、および兩者の友人メイプルトフト(John Mapletot)⁽¹⁹⁾、
ロックの醫術上の手腕と診斷とを尊敬。

一六六八年(三六歳)

王立協會々員に選出される。(一六六九年、七二年には、同協會の評議員となる)。
しかし、協會には餘り出席せず、數人の友人と私的な研究會合を持ち、これを指導。

『解剖學』手記(備忘録)。

一六六九年(三七歳)

アシュリの胸部膿瘍切除の難手術を行い、その一命を救う。

アンソニの配偶者の選擇を付託される。ルトランド卿(Earl of Rutland)の息女、ドロシイ・マナーズ(Dorothy Manners)
との結婚を仲介。

アシュリほか七人の貴族にチャールズ一世から許與された(一六六三年)北米カロライナ植民地のため、『カロライナ政府の基
本制度』を起草⁽²⁰⁾。

『醫術について』手記⁽²¹⁾(備忘録)。

ジョン・ロック年譜

一六七〇年（三八歳）

肺結核の兆候現われる。執拗な咳に悩む。アシュリの盡力により、オクスファード大學醫學博士の稱號を與えられんとするも、反對者あるを知って辭退。反對は、前回の場合と同じく、ロックの・宗教上の見解による。

一六七一年（三九歳）

二月、ドロシイの・男子アンソニの出生を助ける。⁽²²⁾

前述の私的な研究會合において、『人間悟性論』執筆の契機生れる。⁽²³⁾

會合で、右につき最初の見解發表のほか、二つの草稿を執筆。⁽²⁴⁾

秋から冬にかけての執筆のため、健康そこなわれる。

一六七二年（四〇歳）

療養を兼ね、ノーザンブランド伯爵夫人（Countess Northumberland）に隨行し、フランスに旅行。

シャフツベリ卿夫人のため、ビエール・ニョールの『道徳論』のうち三章を英譯。⁽²⁵⁾

歸國後、シャフツベリ卿の大法官任命に伴い、僧職任免局主事に任ぜられ、年俸三〇〇ポンドを受ける。

〔國王チャールズ二世、信仰自由令を改訂。アシュリ、シャフツベリ卿に叙せられる〕。

一六七三年（四一歳）

シャフツベリ卿、その反カソリック主義のため、國王から大法官の地位を免ぜられ、ロックまた、前記の職を離れる。

しかし、シャフツベリ卿失脚の直前、通商植民局主事に任ぜられる。年俸五〇〇ポンドを受けるはずなるも、支拂われず。同局の廢止（一六七五年初め）まで、右の地位にある。

シャフツベリ卿、Country Party ないし Blue Ribbon Party（後のウィッグ黨）の總帥として國王の專制主義にたいする政治攻撃を展開し始める。卿とロック、宗教的・政治的自由、すなわち信教自由と立憲制政府との體制のために協力。

ロック、『政治上の権力と宗教上の権力との相違について』を手記。⁽²⁷⁾この頃、王立協會々報 (Philosophical Transactions) に寄稿。⁽²⁷⁾

一六七四年 (四二歳)

醫學得業士號をえる。
シャーフツベリ卿から年金一〇〇ポンドをおくられ、かつ郷里サマセットの土地からの収入により、裕福な生活を保證されて、研究に専念。

一六七五年 (四三歳) — 一七六年 (四四歳)

十一月。健康上の理由と官職を離れたことにより保養地モンペリエ (Montpellier) におもむくため、三度大陸に旅行 (ニコールの英譯と『人間悟性論』草稿Bとを携行)。⁽²⁸⁾
まず、パリ (Paris) からリヨン (Lyon) に至り、當地のシェズイット派學校の圖書館に感嘆。フランス南部の民情を見聞しつつ、一二月モンペリエに着く (一六七七年早春までここに滞在)。
當地の民富、風俗、産業にすこぶる興味を引かれ、かつまたシャーフツベリ卿の求めにより、『ぶどうとオリヴァとの生育と栽培、絹の生産、果實の保存についての所見』を執筆。⁽²⁹⁾
『人間悟性論』構想進む。⁽³⁰⁾

一六七七年 (四五歳)

春。パリに戻る。シャーフツベリ卿の推舉により、サー・ジョン・バンクス (Sir John Banks) の子息の家庭教師となる。

デカルトの著作集に接し、これを研究。⁽³¹⁾『備忘録 (Adversaria)』に、次ぎの項目を立つる。1. Adversaria Philosophica 2. Adversaria Historica (諸國民の宗教、信仰、法律、制度、民俗にかんするもの) 3. Adversaria Imitanda (諸國民の政治、

および産業にかんするもの）、四、*Adversaria Acquirenda*（諸國の産物、商業にかんするもの）、五、*Historia Physica*（諸國の博物誌にかんするもの）。

「シャーフツベリ卿、反國王的言動によってロンドン塔に投獄される」。

一六七八年（四六歳）

二月。シャーフツベリ卿出獄。

六月。ロック、再びモンペリエをへて、ロマにおもむくため、教え子にともなわれてパリを離れる。途次、オルレアン（Orléans）、ブロワ（Blois）、アンジェール（Angers）地方を通る。ロワール河地方の民衆の貧困に驚く。

一〇月。モンペリエ着。暫く滞在の後、ロマにおもむくためリヨンに至る。しかし、サン・セニ（St Cenis）峠の深雪に妨げられて、ロマ行ついに不能。はなはだ落膽。

パリに歸り、翌年四月まで滞在。その間、當時の・高名な歴史家ドゥ・トゥー（Du Thou）の藏書を見學。

パリ社交界の零團氣の中に、人間の・名聲にないする渴望と、流行が人間に及ぼす影響とを學ぶ。

オランダの・有名な醫師ペーテル・ヘネロン（Peter Guenellon）を知る。

「シャーフツベリ卿、ヨーク公を樞密院から排除することを國王に要求」。

一六七九年（四七歳）

五月。ロンドンに歸る。

〔法王派陰謀事件（the Popish Plot）の風評、國王チャールズ二世の・フランス王ルイ十四世との密約の發覺、王弟ヨーク公（後のジェームズ二世）の王位排斥問題など、政界に重大な事件相次いで起る。〕

シャーフツベリ卿、再び宰相の地位につく。卿、従前のように、ロックの助言を求め、兩者の交際いよいよ密接かつ頻繁となる。この年の・人身保護令（the Habeas Corpus Act）の議會通過の蔭には、おそらくロックの示唆あり。

夏。ロック、再びシャーフツベリ卿に住む。

一〇月。國王、ヨーク公の王位排斥運動によりシャーフツベリ卿を罷免。ロック、卿の孫アンソニの教育の監督に意を注ぐ。

一六八〇年（四八歳）

ロバート・フィルマー（Robert Filmer）の『族長論』その他、王黨派の手によって出版され、ロック、この反ばく『統治論』第一論文）を執筆し始める。

〔下院、ヨーク公排斥法案提出を決議。國王、議會を解散してこれに對抗。〕

一六八一年（四九歳）

三月。ロック、オクスファードに開かれた議會の動向を見まもる。チャールズ二世、フランス王の援助獲得に成功。議會を解散。議會を無視して統治するの意圖を示す。

七月。王位排斥問題にからみ、シャーフツベリ卿、謀反罪のゆえをもってロンドンの私邸に逮捕され、ロンドン塔に投獄される。

十二月。保釋出獄。

卿の・國王の庶子モンマス公（James Scott, Duke of Monmouth）擁立の意圖を、ドライドゥン、『アブサロムとアキトフニル』で諷刺。

一六八二年（五〇歳）

ロック、卿の意圖を知り、自らも若干の政治工作に關係。

夏。シャーフツベリ卿、モンマス公、ラッセル卿（William Russell, Lord Russell）シドニー（Algernon Sidney）の急進的貴族、いわゆるライ・ハウス陰謀（the Rye-House Plot）を計畫。

秋。シャーフツベリ卿、右蜂起の計畫變更を知り、オランダに亡命を決意。十二月。アムステルダムに着く。

卿の亡命後、ロックの地位きわめて不愉快なものとなる。オクスファードに移る。

この頃、『非國教徒の辯明』を書き、また『シドナム醫學の拔萃』を作る。

一六八三年（五一歳）

一月。シャーフツベリ卿、胃けいれんのためアムステルダムに死ぬ。

ジョン・ロック年譜

一 橋 論 叢 第三十二卷 第五號

ライ・ハウス陰謀事件、發覺。ラッセル、シドニイら、「血の巡回裁判」のジェフリズにより、斷頭臺に消える。

六月末ないし七月初め、ロック、オクスファードを離れ、サマセットに退く。

秋。イングランドを去り、オランダにおもむく。『人間悟性論』の草稿Bを携行。

一六八四年(五二歳)

アムステルダムでヘネロンと再會。彼を通じ、當地の・主要な文藝人、科學者を知る。そのひとりに、アルミニア派の神學教授、フィリップス・ファン・リムボルク (Philippus van Limborch)。

全ヨーロッパの・自由な神學者たちの精神に影響を与えていた・アルミニア派神學の・寛容な・倫理學的 성격に、ロックいちじるしくひきつけられる。リムボルクと深い友情で結ばれ、生涯の友となる。

秋。地方を旅行。興味ある風物と、政治、商業、文藝、神學上の諸事情にふれる。特に、レーウアルデン (Leeuwarden) 付近の神祕教徒の共產主義的教團に注目。

この旅行により、體力大いに回復。

クライスト・チャーチ研究生の身分と、これに屬する權利および便宜の一切を剝奪される。理由は、反政府的パンフレット執筆、および、モンマス公のためにする反國王陰謀企畫との懸疑による。大學當局、國王の命令に屈服。

大學當局、査問のため、ロックの歸國を命ずる。

十一月。アムステルダムに歸着。クライスト・チャーチの處置と喚問とを知る。

冬。ユトレヒトで過ごす。『人間悟性論』草稿Bの改訂と増補とに専心。

一六八五年(五三歳)

二月。チャールズ二世死し、ヨーク公王位を繼承(ジェイムズ二世)。

五月。ジェイムズによりハーグに特使として派遣されたスケルトン大佐 (Colonel Skelton) オランダ國民議會に危険人物名簿を提出、身柄の引渡しを要求。その名簿の末尾にロックの名の記載あり。

ロック、ヘネロンの岳父、アムステルダムのフェーン (Veen) の家にかくまわれ、ファン・デル・リンデン (Van der Linden)

と稱す。

アムステルダム市會は、法王主義への恐怖と、自由にたいする同情とから、イングランド國王の意にそわず、オレンジ公 (Prince of Orange) また、亡命者の檢舉に熱意を示さず。

ユトレヒトの隱家に、リムボルク初め友人來訪、ロックもまた、ラミイ (Lamy) と稱してクレイフェ地方に旅行することあり。この間、高名なクエーカー教徒、ウィリアム・ペン (William Penn) およびペンブルック卿 (Earl of Pembroke) ——『人間悟性論』は後にこの人に捧げられた——ロック赦免の嘆願を國王に行つ。

『人間悟性論』の執筆着々と進み、各編の要約を順次イングランドにある友人におくる。リムボルクにあて『信教自由にかんする書簡』を書く。

「モンマス公、ジェイムズに向かって兵をあげ、タワー・ヒルに憤死」。

一六八六年 (五四歳)

年頭アムステルダムに歸る。哲學者でありアルミニア派より更に自由な見解を持つる神學者のル・クレルク (Jean Le Clerc) の知遇をえ、學問的關心の共通性によって親交を結ぶ。

ル・クレルクらの編集にかかる『世界文庫』に『備忘録作成の新方法』(フランス文) を寄稿。

五月。オランダ國民議會の新宣言により、逮捕の危険去る。

九月。永住の豫定でユトレヒトに移るが、間もなく再びアムステルダムに戻る。

二カ月間、ヘネロンの客として過ごし、後にロッテルダムに移る。イギリス人クエーカー教徒で富豪、藏書家のベンジャミン・フーリー (Benjamin Furly) のもとに寄寓。オランダを去るまでの一年餘をここに過ごす。

オレンジ公ウィリアムとその妃メアリとのイングランド國王即位の計畫進み、ロックもこの計畫に積極的に参加。彼がロッテルダムに移ったのは、この地が首都ハーグに近く、かつイングランドとの交通、およびオランダ來訪の本國人に會う上に便であったため。

ロック、モードーント卿 (Charles Mordaunt, 後 1st Earl of Monmouth, 3rd Earl of Peterborough) を介してウィリアム

一橋論叢 第三十二卷 第五號

とメアリとを知り、相互に尊敬を抱き、友情を結ぶ。

その間もフアーリの家にあつて『人間悟性論』その他の主題について執筆⁽⁸⁷⁾。『統治論』第二論文は、この頃書き始められる。また、本國のエドワード・クラーク (Edward Clarke of Chipley) の依頼により、その子の教育方法について述べた手紙をおくる(後に『教育にかんする・若干の考想』として出版される)。

甥ピータ・キング (Peter King)、レイデン大學に學ぶ。

一六八八年(五六歳)

ル・クレルクの『世界文庫』に『人間悟性論拔萃』を寄稿⁽⁸⁸⁾、ル・クレルクこれをフランス譯して掲載。ライブニツ、これを知る。

一月。ウィリアム、イングランドに向つて出發。ロック、オランダにあつてメアリと會見すること數次。イングランド行きを待つ。

ボイルを通じアイザック・ニュートンを知る。

一六八九年(五七歳)

二月。王妃の一行、ロックとモードント卿夫人とに件われて、ハーグを出發。グリーニツチに上陸。

モードント卿を通じ、ブランドンブルク選帝侯フリードリヒ一世への大使の地位を、次いでウィーンへの大使の地位を申出られる。健康上の理由でいずれも辭退。控訴院の局長に任命される。

ロンドンの煙霧のため健康大いにこなわれる。

三月、『信教自由にかんする書簡』、ロックの關知せぬ間に、おそらくリムボルクの手により、オランダのフーダ (Gouda) 人名で出版される。

五月、『人間悟性論』のためペンブッルク卿への獻辭執筆。印刷始まる。校正刷をル・クレルクに送付。

ロンドンの商人、ユニテリア派のウィリアム・ポップル (William Popple) 『信教自由にかんする書簡』を英譯、まえがきを付し匿名で出版。⁽⁴⁰⁾

『統治論』完成。

ニュートンと更に接近。

一六九〇年 (五八歳)

二月。『統治論』匿名で出版。⁽⁴¹⁾

三月。『人間悟性論』匿名で出版。著作権料として三〇ポンドを受けとる。⁽⁴²⁾

『信教自由にかんする書簡』をめぐる活潑な論争起る。ジョン・ナス・プロースト (Jonas Proast)⁽⁴³⁾ への反論のために、ロック、フイラントロプスの筆名で、『信教自由にかんする第二書簡』執筆 (五月)。

一〇月。『第二書簡』出版。⁽⁴⁴⁾ プロースト反批判。

ビヤートン (Bemerton) の有名な牧師でマルブランシュの弟子ジョン・ノリス (John Norris)、『人間悟性論』を批判。⁽⁴⁵⁾ 秋。大病。

一六九一年 (五九歳)

夏。休息と保養のため、ロンドンから二〇マイルの風光明媚の地オーツ (Oats) に居を移す。ケインブリッジ・プラトニストの巨頭ラルフ・カッドワース (Ralph Cudworth) の息女、マッシュム (Lady Masham) と親交を結び、その好意によって同邸に住む。餘生をここでおくる。

しかし、政局への関心を失わず、常にウィッグ黨政策に大きな影響を與える。

マッシュム家の人々、リンボルク、ル・クレルク、ピータバラ卿、舊友ジェイムズ・ティレル (James Tyrrell)、エドワード・クラーク、その息女ベッティ、ボイルのほか、ペンブルック卿、シャーフツベリ卿 (第三代)、大法官サー・ジョン・サマーズ (Sir John Somers)、ニュートン、および哲學者モリスヌクス (William Molyneux) と交友関係を持つ。

ジョン・ロック年譜

一橋論叢 第三十二卷 第五號

後に國務でオランダにおもむいたベンブルック卿、ロックの紹介により、リンボルク、ル・クレルクと交わる。ロック、リンボルクに依頼し、ベンブルック卿を通じて、『ライプツィッヒ學報』⁽⁴⁸⁾を入手。

シャーフツベリ卿、『養父』ロックの學説を批判しつつも、哲學上の諸問題につきこれと討論。

サマーズ、政治、財政、および信教自由の問題につきロックの影響を受ける。ロックまた、卿によってハリファックス卿 (Charles Montagu, 1st Earl of Halifax) を知る。

當時造幣局長であったニュートンと面會。神學問題について討論。ロック、ニュートンの神學論文のフランス譯と出版とを企圖。その草稿をル・クレルクにおくる。

ボイルとの親交續く。一六九一年一二月、これを死の床に見舞うため、ロンドンに旅行。遺言執行人のひとりとなる。これより先、ボイルの『大氣の一般史』の編集を託され、一年をほとんどこれにあてる。

『政治論』フランス譯出版される。⁽⁴⁹⁾

十一月、『貨幣金利論』執筆。

一六九二年(六〇歳)

『貨幣金利論』匿名で出版。⁽⁴⁸⁾

プローストへの再反論のため、同じくフィラントロプスの筆名で『第三書簡』執筆。ダブリン大學のモリスヌクス、『新光學』を出版。この中でロックへの尊敬の念を吐露、同書をロックにおくる。

夏、『第三書簡』印刷校閲のため、ロンドンにおもむく。⁽⁴⁹⁾

リムボルクに代り、その著書『審問史』を、カンタベリ大司教ティロットソン (John Tillotson) に獻げる許可をえる。

秋、『人間悟性論』賣盡される。

モリスヌクス、倫理學についての執筆をロックにしようよう。⁽⁵⁰⁾ また大學學生のために論理學および形而上學の綱要執筆を示唆。冬。健康いちじるしくこなわれる。

一六九三年（六一歳）

三月。『教育にかんする・若干の考想』のためクラークへの献辭執筆。

六月。右書を匿名で出版。⁽⁶¹⁾

『人間悟性論』第二版のための準備。ノリス（一六九〇年の項参照）の『人間悟性論』への批判にこたえるため、マルブランシュを研究。『萬物を神の中に見るといふ・神父マルブランシュの意見を主張する・ノリス氏の著書の若干についての註解』および『萬物を神の中に見るといふ・神父マルブランシュの意見の吟味』を執筆。

一六九四年（六二歳）

五月。訂正追加を施された『人間悟性論』第二版賣出される。⁽⁶²⁾

『統治論』第二版出版。⁽⁶³⁾

『神學備忘録』手記。⁽⁶⁴⁾

イングランド銀行の設立株主のひとりとなる。五〇〇ポンドを應募。

ピータ・キング、ミドル・テンプル法學院（The Middle Temple）に入學。ロック、これと往復。

一六九五年（六三歳）

春。議會を通じての・出版檢閲法の廢止に指導的役割を果たす。下院に提出された右提案理由書を執筆。

『聖書に示された・キリスト教の合理性』執筆。⁽⁶⁵⁾

六月。右書を匿名で出版。

『人間悟性論』第三版（第二版の再版）出版。⁽⁶⁶⁾

ケインブリッジのジョン・エドワーズ（John Edwards）の『無神論の原因と機縁とにかんする考想』によってロックの『合理性』を論難。ロック『エドワーズ氏の省察にたいする・キリスト教の合理性の辯護』⁽⁶⁷⁾（匿名）によってこれにこたえる。

冬。『合理性』第二版出版。⁽⁶⁸⁾

ジョン・ロック年譜

大陸におもむいた國王の代行者大審院のため、右の判事でありかつ友人のハリファックス卿、サマーズ卿のしようよつによつて、『イングランドにおける・銀貨の鑄造と保有とを奨励するために、と題された印刷物にかんする簡見』⁽⁶²⁾を執筆。右を簡略にした『貨幣價值引上げにかんする續考』を大審院に提出。一二月。右論文出版。⁽⁶³⁾
この頃、『古イングランド法制』執筆。⁽⁶⁴⁾
冬。健康すぐれず。

一六九六年（六四歳）

オクスファードのジョン・ワイン（John Wynn）、大學々生のために『人間悟性論』拔萃出版。

『神——デカルトの・神の證明の吟味』⁽⁶⁵⁾手記。

『キリスト教の合理性』フランス譯出版される。

バーボン、テンプル、匿名著者ら、ロックの『貨幣考』を批判。⁽⁶⁷⁾

五月。『貨幣考』の影響により、幣制政策にかんする法案、兩院を通過。造幣局長ニュートンこれに協力。

ライブニッツ、『ロック氏の人間悟性論について』なる批判⁽⁶⁸⁾を、トマス・バーネット（Thomas Burnet）⁽⁶⁹⁾を通じロックにおくる。ロック、これにこたえず。

夏、秋。ロンドンに住む。

秋。ウースタ（Worcester）の司教ステイリングフリート（Edward Stillingfleet）、その著『三位一體説の辯護論』⁽⁷⁰⁾によって、『人間悟性論』を三位一體説に反するものと攻撃。

通商植民局（後の商務省）復活。ロック、その委員のひとりに囑託される。内外の商業状態、有益産業の奨励、導入の方法の研究、および、植民地の統治、司法、本國との關係、通商状態などの調査にあたる。年俸一〇〇〇ポンドを受ける。

ロック、冬。右委員会から、仲裁による・取引上の紛争処理方法の研究を特に委嘱される。

一六九七年（六五歳）

『キリスト教の合理性辯護第二』を匿名で出版。⁽⁷¹⁾
『ウースタの司教への書簡』出版。⁽⁷²⁾ステイリングフリート、これへの『回答』出版。⁽⁷³⁾ロック、再び『返答』出版。⁽⁷⁴⁾

夏。委員会、アイアランドの羊毛製造業に代わる麻製造業奨励の方途を研究。各委員、報告を提出。ロックの報告採用され、大審院に提出される。⁽⁷⁵⁾

秋。樞密院、貧民の就業について考究。商務省委員、労働学校、就業施設にかんする改革案を起草。ロックの成案採用され、樞密院に提出される。⁽⁷⁶⁾

健康上の理由、任務の煩雑、および、委員として知った・支配階級裏面の腐敗にたいする嫌悪から、委員辞任の意をもちます。國王これを知り、フランス特派大使ポートランド卿（William Bentinck, 1st. Earl of Portland）輔佐の地位を申出る。これを辭退。

一九七八年（六六歳）

クラークとその息女ベティ、リムボルクの子息、ファリーの子息ら、しばしばオーツにロックをたずねる。ロック、ベティを寵愛。夏。モリヌークス、ロックを訪れる。

ピータ・キング、オクスファードのトリニティ・ターム（The Trinity Term）に出席。ロックとの往復續く。

ライブニッツ、『新刊主要書拔萃月報』にロック批判の『拔萃』を掲載。⁽⁷⁷⁾ステイリングフリート、第二の『回答』出版。⁽⁷⁸⁾

一六九九年（六七歳）

ステイリングフリートにたいし三度『返答』出版。⁽⁷⁹⁾

一七〇〇年（六八歳）

『人間悟性論』第四版出版。⁽⁸⁰⁾

ピエール・コスト（Pierre Coste）右版に基いてフランス語出版。⁽⁸¹⁾ ライブニッツ、右フランス語によって、『人間悟性論』を綿密に検討。まず、その概要を記す。「キング、總選舉で下院議員に選出される。彼は後に大法官となる」。

ロック、商務省委員を辭任。

著名な醫師であり王立協會議長サー・ハンス・スローン（Sir Hans Sloane）と交友。共に曆の改正を意圖。⁽⁸²⁾

ドーセット（Dorsetshire）の聖職者サミュエル・ボウルズ（Samuel Bolde）⁽⁸³⁾ オーツに來訪。ボウルズは、かつて『合理性』および『悟性論』をめぐる論争においてロックを支持。⁽⁸⁴⁾

ロックまた、自然神教主義者アンソニー・コリンズ（Anthony Collins）⁽⁸⁵⁾を知り、その才能を評價。

一七〇一年（六九歳）

四月。キング、第三代シャーフツベリ卿とオーツに來訪。

『人間悟性論』ラテン語出版される。⁽⁸⁶⁾

「フランス、スペインと同盟を結ぶ」。

「ジェイムズ二世、サン・ジャルマンに死ぬ。フランス王、ジェイムズの子を英國王と認める。英國の朝野緊張」。

「二月。右にかんしウィリアム三世、新議會で勅語。全國民の愛國心を刺戟」。

ロック、キングから勅語の寫しを入手。イングランドの國民的自立について憂慮。

「ウィリアム三世死ぬ」。

一七〇二年（七〇歳）

秋。ニュートンの訪問を受ける。神學問題について討論。ロック、ニュートンに、コリント書にかんする覚え書⁽⁸⁷⁾を示す。ニュートン

トン、これを借受けて返却せず。キング、ロックの委嘱によりこれを取戻す。ニュートン、右覚え書について賞讃の手紙を寄せる。
 十一月。ピーターバラ卿、西インド諸島のスペイン領探險に出發の別れを告げるため、夫人とオーツに來訪。

この頃、『人間悟性論』フランス譯に加筆。⁽⁸⁸⁾

ロックの諸著作の出版元チャーチル (A. Churchill, & J. Churchill) 編『航海旅行記集』の序文として『航海史』執筆。⁽⁸⁹⁾

一七〇三年(七十一歳)

プロースト、三度『信教自由にかんする書簡』に反論。ロック、『信教自由のための第四書簡』執筆(未完)⁽⁹⁰⁾
 冬。健康危まれる。

一七〇四年(七十二歳)

四月。死を豫感。友人、近親係累に遺言。財産は、マッシュム嬢の弟フランク (Frank Masham) とピータ・キングとに、草稿はすべてキングに残される。⁽⁹¹⁾ キング、遺書執行人および殘餘財産受贈者に定められる。所有地については遺言なし。法によって、ふたりの甥、キングとピータ・ストラットトン (Peter Stratton) とに歸屬。葬儀は、簡素を旨とするべく、殘餘はオーツの・四人の・貧困な労働者に分與されるべく定められる。

夏に至るも、體力回復せず。病狀悪化の兆候増す。生涯の・最後の時を最も親愛な者と過ごすため、キングおよびコリンズをしばしばオーツに招く。これとの談合に快活な時を過ごす。

九月。キング、結婚。妻とオーツに來訪。ロック、これを迎えて喜ぶ。ロック、キングにフランク・マッシュムの將來を託す。

一〇月。體力とみに衰える。

二七日。衰弱はなはだし。

二八日。朝、少康をえる。

午後、起上り衣服をあらため、坐してマッシュム嬢の・箴言を讀むのを聞く。たちまちに目をとじ、靜かに息を引きとる。
 一〇月三〇日。エセックスのハイ・レイヴァ (High-Laver) にある教會墓地に葬られる。

ジョン・ロック年譜

一 橋論叢 第三十二卷 第五號

墓碑銘（ロックの自作。ラテン文）。

『漂泊の人よ、足をとどめよ！ここにジョン・ロック眠る。——なんじ、彼の何者なりしかを問わば、彼かくこたえん。運命に心足りて生ける者なり、と。學びの道に育まれてしかど、彼の知りえたるはただ、ひとり眞理にのみ身をささげるてうことのみ。そを彼の書より知れ。こは、疑わしき・墓碑銘の頌詞よりも正しく、彼に能わざりしものなるか、をなんじに告げん。彼の徳は、よしかかるものありしとて、餘りに小さきものなれば、彼はこれを誇りえず、あるはまた、こはなんじの範となる能わす。彼の犯せし謬りは、共に地に葬られんことを。なんじもし徳の範典を求めなば、福音の中にこれをえん。罪の範典はいずこにも見いださざらんことを！死の影（そはなんじの誠めとなる）は、なんじによりてここに、また、あまねく見いださる。

彼、主の一六三二年、八月二十九日に生をうけ、主の一七〇四年、一〇月二十八日にみまかる、とこの墓表は告ぐ。この文字すらもまたたちまちに薄れ行かん。——』

ライブニッツ、ロック批判『人間悟性新論』を完成するも、ロックの計をきいて出版を遠慮⁽²⁾。

一七〇六年

ロックの遺稿集出版される。（*は、執筆年代不明を示す）。

Posthumous Works of Mr John Locke: viz I. Of the Conduct of the Understanding.* II. An Examination of P. Malebranch's opinion of seeing all things in God. III. A Discourse on Miracles.* IV. Part of a fourth Letter on Toleration. V. Memours relating to the Life of Anthony first Earl of Shaftesbury.* To which is added, VI. His New Method of a Common-Place-Book, written originally in French, and now translated into English. 8° pp. 336. London, J. Churchill.

一七〇八年

往復書簡集出版せむ。

Some Familiar Letters between Mr. Locke, and Several of his friends. pp. iv—540. London.

一 十 一 〇 号

ノインク雜誌編輯集出版せられぬ。

Oeuvres diverses de M. Jean Locke. [Précédé d'un éloge historique de l'auteur par Jean Le Clerc]⁽²⁾. — Lettre sur la tolérance. — De la Conduite de l'esprit dans la recherche de la vérité. — Discours sur les miracles. — Méthode nouvelle de dresser des recueils. — Mémoires pour servir à la vie d'Antoine Ashley, Cte de Shaftesbury. Rédigés par J. Le Clerc. 120 pp. vi-c—468. Rotterdam. *Fritsch et Böhm*.

一 十 一 四 号

殘稿集出版せられぬ。

The Remains of John Locke, viz. I. Memoirs of the life of Dr E. Pockoke. II. Instructions for the conduct of a young gentleman. * III. The best method of studying.....the Scriptures. * IV. Sentiments concerning the Society for promoting Christian Knowledge.To which are added three copies of verses, etc. fol. pp. iv—20. London, *E. Curll*. 雜誌編輯集出版せられぬ。

The works of John Locke, etc. (including the Remains of John Locke.....). Published from his original manuscripts. —An account of the life and writings of John Locke [by J. Le Clerc], the 3rd edition). (with a portrait). fol. London, 3 vols.

一 十 二 〇 号

未刊稿集出版せられぬ。

A Collection of several pieces of Mr John Locke, never before printed, or not extant in his works. Publish'd by the Author of the Life of J. Hales, etc [i. e. P. Des Maizeaux] under the direction of Anthony Collins, with the character of Mr Locke by Mr P. Coste. —The Fundamental constitution of Carolina. —A Letter from a person of quality, to his friend in the country, giving an account of the debates and resolutions of the House of Lords in April and

May 1675, concerning a bill entitled: An act to prevent the dangers which may arise from person disaffected to the Government.*—Remarks upon some of Mr. Norris's books, wherein he asserts F. Malebranche's opinion of our seeing all things in God. —Elements of natural philosophy.*—Some thoughts concerning reading and study for a gentleman. —A Letter to Mr. Oidenburgh, secretary to the Royal Society. —Letters to Anthony Collins. —A letter to the Rev. Mr. Richard King. —A letter to.....on Dr. Pococke. —Letters to the Rev. Mr. Richard King. —Rules of a society, which met once a week, for their improvement in useful knowledge, and for the promoting of truth and christian charity.* 8. pp. xxiv—362. London, R. Franklin.

註

- (1) 後年ロッキンが、『教育論』の中で、子どもの時になつては父は畏怖すべき絶対支配者であるべく、長ずるとなつて次第にその友人とならなへつはならぬ、と述べる時、彼は自らの父の態度を回想してゐる。
- (2) 「私は、この世に生をうけるやうな、一つの嵐の中に私を見いだした」(「一六六〇年當時における道徳」)と述べているように、「内亂」時の世情がその父を通じてロッキンに與えた作用に注目する必要がある。
- (3)(4) 『教育論』の中に、學校教育にたいする否定的見解があるのは、この経験によるものである。
- (5) 道徳哲學その他について、ロッキンの覚え書が、父の備忘録中に見いだされた。
- (6) このほか二つの機會にロッキンが詩を書いたことが、Oxford Books, A Bibliography of printed works relating to the University and City of Oxford, or printed or

published there, vol. 3, Oxford Literature 1651—1680. By T. Madan, Oxford, Clarendon Press 1931. No. 2243, 2466, 2578, に記載されてゐる。

(7) 'An Essay in Defence of the Good Old Cause; or a Discourse concerning the Rise and Extent of the Power of the Civil Magistrate in Reference to Spiritual Affairs.....'

(8) 'The Great Question concerning Things Indifferent in Religious Worship Briefly Stated.'

(9) 'Whether the civil magistrate may lawfully impose and determine the use of indifferent things in reference to Religious Worship.' この標題の「ふへ」は Lord King: The Life of John Locke, with extracts from his Correspondence, Journals, and Common-Place Books, 2 vols. London, 1830.) に於いて正確である。この「ふへ」は、最近キーンランド大のライオン博士によって

クスフアド・ボドリ圖書館所蔵の・ラウレース・コレクショ
ン整理によって、右は、四折判三六葉から成る本論説のま
えがきの・しかも一部にすぎないことが、判明した。

ラテン語の論説は、'An Magistratus Civilis possit res
adiaphoras in divini cultus ritus aspicere, eosque po-
tulo imponere? Affirmatur.' といは、前掲の英文論説と
同じ折り本の中に発見された・Lemmata と題されたノート
中の・一六二七の草稿。

(10) 'Reflections upon the Roman Commonwealth.'
四六二七の草稿。Public Record Office のシャーンマン
リ草稿の間に保存される。

(11) 「一橋論叢」本號の拙稿「ジョン・ロックの政治哲學
における『同意』理論」第四節参照。

(12) 一二の項目下にそれぞれ執筆された。この中、六つの
論説は、Lemmata と題されたノートの中に、その他は草
稿の小ノートに記入されてゐる。

本年六月、右の諸論説が印刷出版された。(Essays on the
Law of Nature. Ed. by W. von Leyden. Demy 8°. Illus. 300 p. *Clarendon*. The Latin text with a transla-
tion, introduction, and notes, together with transcripts
of Locke's short hand in his Journal for 1676.)

(13) ロックの創作ノートに當る。『人間悟性論』草稿Aそ
の他の・重要な手記が、この中から発見されてゐる。

(14) 前掲拙稿第四節参照。

(15) 「シャーフツベリは、王制的・國教的組織の遂行に對

ジョン・ロック年譜

抗して決定的な成功をおさめたのであるから、その名はイギ
リス史上永遠に忘れられぬことである。彼は、ロックと
同じく信教自由の概念から出發した。ロックの原則は、シャ
ーフツベリの原則である。彼らふたりの友情は、成年期の・
あらゆる・眞實な友情と同じく、共通の思想に支えられてい
る」(Ranke: *Englische Geschichte*)。

(16) ホイルの『大氣の一般史 (General History of the
Air)』の中に『記録』として收められてゐる。ロックは、ホ
イルの同書の編集にあつた(一六九一年の項参照)。

(17) 'Essay concerning Toleration.' といふ決定的に信
教自由の思想を表明。

この論文は、シャーフツベリ草稿の間から発見されてフォ
クス・ボウフン (Fox-Bourne: *Life of John Locke*) に
より印刷された。他に二種の草稿がある。一つは、『備忘録』
の中に、いま一つは、ラウレース草稿の中に発見された。

(18) Brown, J.: *Locke and Sydenham with other oc-
casional papers*, 2nd edition, pp. xiv, 480. Edinburgh.
1859, pp. 1—99.

(19) 'Anatomica.'

(20) 'The Fundamental Constitution of Carolina.' 構
想はロックのものではない。ただし、信教自由にかんする部
分は、彼の意見にしたがつて訂正を加えられた。シャーフツ
ベリ草稿の間から発見されたもの。

(21) 'De arte medica.'

(22) 第三代シャーフツベリ卿となる。彼は、『性格論 (Cha-

一橋論叢 第三十二卷 第五號

acteristics of Men, Manners, Opinions, and Times』(彼の著作集)に「エッセイ・オピニオン・メンタルの始祖」となる。

(32) cf. 'The Epistle to the Reader. この出席者、友人、ジャmes・タイレル(James Tyrell)によれば、哲論は道徳と啓示宗教とにかならずあるべきものだ。ロマンは人間の認識能力の限界と、悟性・正しさを断念しかならず研究されたことは、右の哲論の難解な困難である。この発見したるべきだ。

(33) 會せり發表した草稿は発見された。二つの草稿は、次をのぞくべきだ。

a) Sic Cogitavit de Intellectu humano jo: Locke an 1671. Intellectus humanus cum cognitionis certitudine, et assensus firmitate. 人間の心は、(徳性論中)本文は英文、約三篇。この草稿は、An Early Draft of Locke's Essay together with excerpts from his journals, edited by R. I. Aaron and J. Gibb. pp. xxviii, 132. Oxford. Clarendon Press, 1936. (草稿の心は、この)

b) [Intellectus] 1671 I [De Intellectu humano 1671 An Essay] An Essay concerning the Understanding, Knowledge, Opinion and Assent. 人間の心は、(徳性論中)本文は、(徳性論中)本文は、この草稿は、An Essay concerning the Understanding, Knowledge, Opinion, and Assent. Edited with an introduction by Benjamin Rand. pp. ix, 307 Cambridge, Harvard U. P. 1931. (草稿の心は、この)

草稿Bは、Aに比し、内容、構成ともに成熟し、『人間悟性論』本論に接近している。

(32) 次の表題で出版された。Discourses: translated from Nicole's Essays by John Locke, with important variations from the original French. 1. On the existence of God. 2. On the weakness of man. 3. On the way of preserving peace. Now first printed from the autograph of the translator, in the possession of T. Hancock (the editor). London, 1828.

(33) 'On the difference between civil and ecclesiastical power, indorsed excommunication. Dated 1673-4.' (King: Life of Locke. vol. II. pp. 108-119).

(34) Philosophical Transactions, vol. X, XIX, XXIV.

(35) 1674年4月10日の雑誌の草稿は、Locke's Travels in France 1675-1679 as related in his journals, Correspondence and other papers. Edited with an introduction and notes by John Lough. Cambridge, Cambridge, U.P. 1953 pp. K VII, 309. Contents: The journal (November 1675-May 1679). Appendix (A). Draft of a Letter of Locke (1 March 1676). (B) A Supplement to the Journal of 1679. (C) List of Philosophical Passages in the Journal. (November 1675-May 1679).

(36) 'Observations upon the Growth and Culture of Vines and Olives: The Production of Silk: The Preservation of Fruits. Written at the Request of the Earl

- of Shaftesbury; to whom they are inscribed. ロンドン
 の論議 一六六九年一月、シャーナムの勲に
 宛てた書翰は「Observations……」[Edited by G. S.]
 London, 1766.
 (36) cf. Aaron, Gibb: op. cit., Excerpts from journals
 (1676—1682): Lough: op. cit., Appendix (C.)
 (37) cf. Aaron, Gibb: Exc. fr. Jr. Aug. 8, 1677,
 Mar. 7, 1678.
 (38) cf. Aaron, Gibb: Exc. fr. Jr. Sep. 4, 1677.
 (39) 'A Defence of Nonconformity' ロンドン版
 King: op. cit., vol. II. pp. 196—218.
 (40) 'Anecdota Sydenhamiana (Extracts of Sydenha-
 mae Physical Books).
 (41) 'Bibliothèque universelle et historique. Ed. par
 J. Le Clerc, J. Cornand de Lacroze, et J. Bernard. vol.
 1—25. Amsterdam, 1686—94.
 (42) 'Méthode Nouvelle de dresser des Recuils,'—
 «Bibl. univ.» vol. II.
 (43) 『世界文庫』の寄稿「キーンの著書批判」を
 見よ (Review of Boyle's 'De Specifcorum Re-
 mediorum cum Corpusculi philosophia Concordia.—
 «Bibl. univ.»).
 (44) 'Abstract of the Essay.' ロンドン版 King: op. cit.,
 vol. II. pp. 231—295 註參
 (45) 'Epistola de Tolerantia ad Clarissimum Virum
- T [heologic] A [pud] R [emontrantes] P [rofessorem] T
 [yranidis] O [isorem] L [imborchum] A [instelodamer-
 sem] Scripta a P [acis] A [mico], P [ersecutionis] O [so-
 ro], J [oanne] L [ockio] A [nglo].? Gouda ([〕
 1678 年 12 月 24 日版)
 (46) 'A Letter concerning Toleration [by John Locke,
 translated from the Latin by W. Popple]. 4^o. pp. iv—
 61. London, A. Churchill.
 (47) この著作の初版本は、現在ロンドン合衆國國會圖書館
 の蔵本(1巻)に属する。Two Treatises of Governme-
 nt; in the former the false principles and Foundations
 of Sir R. Filmer, and his followers, are detected and
 overthrown. The latter is an Essay concerning the true
 original, extent, and end of Civil-Government. [by
 John Locke]. London, A. Churchill pp. 6, 467
 (48) 'An Essay concerning Humane Understanding.
 fol. pp. 362. London, T. Basset.
 (49) 'The Argument of the Letter concerning Toler-
 ation, briefly answered.'
 (50) 'A Second Letter concerning Toleration [signed
 Philanthropus, i. e. John Locke] ((In Reply) to the
 author (J. Proast) of the Argument of the Letter con-
 cerning Toleration, briefly answered).' 4^o. pp. 68. Lon-
 don, A. and J. Churchill.
 (51) 'Curasory Reflections upon Book called An Essay

Things in God.' 宗教の寶庫 A Collection of several pieces of Mr. John Locke, published by P. Des Maizeaux. London. 1720. 9/54°

(33) 'An Examination of P. Malebranche's opinion of seeing all things in God.' 神々々々神々々々 Posthumous Works of Mr. John Locke. 1706. 9, 16, 40°.

(54) 'An Essay concerning Humane Understanding', 2nd edition with large additions, fol. pp. 407. London, *A. and J. Churchill and S. Manby*.
(55) 前註(41) 参照。
(56) 'Adversaria Theologica', King: op. cit., vol. II, pp. 186—194.

(57) 'The Reasonableness of Christianity, as delivered in the Scriptures [by John Locke].' 8° pp. II, 304. London, *A. and J. Churchill.*

3rd edition, fol. pp. 409, London, A. and J. Churchill and S. Manship.

and occasions of Atheism..... With.....Reflections.....
on a late book, entitled, The Reasonableness of chri-

(8) 'A Vindication of the Reasonableness of Christianity,' 8°.

anism from Mr. Edwards' Reflections, etc [by John Locke].

- new Money lighter. In answer to Mr. Locke's Considerations about raising the value of money,' 89.
- Temple, (Sir R.): 'Some short remarks upon Mr. Locke's book, in answer to Mr. Lounds.....concerning coin,' 40, [anonymous]: 'A Review of the Universal Remedy for all diseases incident to Coin. With Application to our present circumstances. In a letter to Mr. Locke,' London. [anonymous]: 'Some considerations about the raising of Coin, in a second letter to Mr. Locke,' pp. 52. London, *A. and J. Churchill.*
- (38) 'Sur l'Essay de l'entendement humain de Monsieur Locke,' cf. Leibniz, G. W.: Die philosophische Schriften, Hrsg. von C. J. Gerhardt, Bd. 5, (2. Abr.: Leibniz und Locke), Berlin, 1882.
- (39) 'レキホニヤニシテモハナキ所ノ辨セ方ニモ' 'Remarks upon an Essay concerning Humane Understanding, in a letter to the Author,' 1697. 'Second Remarks upon an Essay etc.' 1697. 'Third Remarks etc.' 1699.
- (40) 'Discourse in Vindication of the Trinity.'
- (41) 'A Second Vindication of the Reasonableness of Christianity, etc. by the author of the Reasonableness of Christianity, etc [by A. B. i. e. John Locke]. pp. 480. London, *A. and J. Churchill.*'
- (42) 'A Letter to the Bishop of Worcester concerning some Passages relating to Mr. Locke's Essay of Humane

ne Understanding in a late Discourse of his Lordship's in Vindication of the Trinity.'

(2) 'The Bishop of Worcester's Answer to Mr. Locke's letter, concerning.....his Essay of Humane Understanding, etc.'

(24) 'Mr Locke's Reply to the right reverened the Lord bishop of Worcester's Answer to his letter,', 80, pp. 174. London, *A. and J. Churchill.*

(25) 出題文' Board of Trade Papers. 9, 1, 40

(26) 出題文' [Lindsey Society for the promotion of Industry]. An account of the Lindsey Society....., in the Southern District of the parts of Lindsey, in the county of Lincoln. The 3rd edition.....to the edition is also added a Report of the Board of Trade.....respecting the relieve.....of the poor, drawn up in 1697 by Mr. John Locke, with notes by the editor. pp. ix, 14, 152. 1789.

(27) Echantillon de Réflexions sur le I. Livre de l'Essay de l'entendement de l'homme. Echantillon de Réflexions sur le II. Livre. Vgl. Gerhardt: op. cit.

(28) 'The Bishop of Worcester's Answer to Mr. Locke's Second Letter; wherein his Notion of Ideas is proved to be Inconsistent with it self, and with the Articles of the Christian Faith.'

(29) 'Mr Locke's Reply to the right reverened the

Lord bishop of Worcester's Answer to his second letter,', 8^o pp. 453. London, *A. and J. Churchill.*

(30) 'An Essay concerning Humane Understanding. 4th edition with large additions. fol. pp. 438. London, *A. and J. Churchill, and S. Manshop.'*

(31) 'Essai philosophique concernant l'entendement humain, où l'on montre, quelle est l'entendue de nos connoissances certaines et la manière dont nous y parvenons, traduit de l'Anglois de Mr. Locke, par Pierre Coste, sur la 4^e édition, revue, corrigée et augmentée par l'auteur. 4^o. pp. 936. avec table, portrait, gravé. Amsterdam, *H. Schelle.'*

(32) Vgl. Gerhardt: op. cit.

(33) 一六五〇(一五二)年の議會の報告の改正は實現された。

(34) 一六七八年に『合理性』を、九九年に『悟性論』を編纂した彼の論文は次ぎに收録されている。'A Collection of Tracts publish'd in Vindication of Mr. Locke's Reasonableness of Christianity.....and of his Essay Concerning Humane Understanding. 1706.'

(35) 一七二〇年のロッキンの論集は、ロッキンの指導のもとに、メンデルスブルグが行われた。

(36) 'De Intellectu humano, in quatuor libris, autore Johanne Lockio,.....Editio quarta aucta et emendata, et nunc primum latine reddita.....[by R. Burridge].'

pp. 317. London, A. and J. Churchill

(87) 'A Paraphrase and Notes on the Epistles of St Paul to the Galatians, First and Second Corinthians, Romans, and Ephesians. To which is prefixed an Essay for the Understanding of St Paul's Epistles by consulting St Paul himself,' 版次『Works, 9th. edition, (9 vols) vol 7. London, G. & A. R. 1792』の第7巻を研究してゐたものである。

(88) 後編 'Essai philosophique concernant l'entendement humain, par M. Locke, traduit de l'anglois par M. Coste, 2^e édition, revue, corrigée et augmentée de quelques additions importantes d'auteur qui n'ont paru qu'après sa mort, et des quelques remarques de traducteur.' 4^e, xlvii, 595, avec table et portrait, Amsterdam, P. Moitteur, 1712 年 出版 4 冊。

(83) 'An interesting discourse containing the whole history of Navigation from its original to the present time.' To 'Churchill (A) and (J.): A Collection of Voyages and Travels, etc.' fol.

(90) 印刷は、Posthumous Works (1706) の、

(91) ピーター・キングの曾孫ローランド・ピーター・キング (Lord Peter King) が、その家に傳わる。ロケットの草稿を資料に、最初の彼の傳記 (The Life of John Locke, with extracts from his Correspondence, Journals, and Commonplace—Books, New edition. 2 vols. viii, 447, 375, 143.

London, 1833) を書いた。また、現在オクスファードのボドリー圖書館に所藏される（ロックの草稿にわゆるラヴレース・コレクションを含む）の所有主であったラヴレース卿は、キングの直裔。

(92) 'Nouveaux essais sur l'entendement humain, / 1765. 次ぎの著作集の中心初めて出版された。Oeuvres philosophiques, latins et françois, de feu Mr. de Leibniz, tirées de ses manuscrits, qui se conservent dans la bibliothèque royale de Hanover. Éd. par R. E. Raspe. Amsterdam-Leipzig. 1765.

(93) これは最初、ル・クレルク編の *Bibliothèque choisie* pour servir de suite à la *Bibliothèque universelle*. (1700-1713. 26 vols.) Tom. vi. (1705) に掲載された。

(94) 一六五四年の項への註(6)参照。

(95) これは最初『Nouvelles de la République des Lettres』(これは「モータル・サイエンス」編集の同名の雑誌 [1684—1687 7 vols.] の後継誌) Histoire des ouvrages des sçavans, éd. par H. Basnage, (Rotterdam, 1687—1709. 25 vols.) の中の第 10 冊の 170 頁の 2 号に「Une épiître de Mr. Coste à l'auteur de Les Nouvelles de la République des Lettres écrite à l'occasion de la mort de Mr. Locke, le 27^e Mars 1704」

(鈴木秀勇)